

日本思想史が志向するもの——コメント——

山東 功

日本思想史が「神話」を描くということは、具体的に神話を構成する諸「テクスト」と対峙し、そのテクストを再構成するということに他ならない。それならば、ここで問われていることは、日本思想史研究におけるテクストに向かうあり方なのであろう。テクストそのものを徹底的に読み抜くという方法や、テクストを形成した状況を精査するという方法も、究極的にはいかにテクストに向かい合うかという、いささか旧聞に過ぎたきらいはあるものの本質的な問いへの答であることには間違いない。そこで、本シンポジウムにおいて提起された「転生する神話」という視点設定を、日本思想史の志向性と解することで、以下に愚見を呈することとしたい。

いみじくも、西谷啓治が「宗教とは何かといふことは、

裏から見れば宗教といふものが我々にとつて何のためにあるか、我々になぜ必要かといふことである」(西谷啓治(一九六一)、三頁)と述べたように、「〇〇とは何か」という問いは、なぜそう問いかけるのかという点を不問にした問題設定である。西谷は「その問ひを出す人にとつては、宗教はまだ必要になつていない」と主張するが、ここで宗教を「神話」と置き換えてみても事態はさほど変わらない。なぜ「神話」を問いかけるのか、という大前提に対して無頓着なあり方は、例えば、神話を構成する諸テクストへの無自覚な妄信を助長することにもなりかねないのである。事実、日本の伝統讚美の神話論にしても、近代ナショナリズム批判としての神話論も、マクロにおける時代的狀況やミクロにおける主体的懊悩が可

能にしたものであろうし、そうした前提はいわば普遍の問題として、われわれの前に対峙していくはずなのである。これは日本思想史を高踏的に位置することに對する評者の躊躇に他ならない。

それでは、なぜそうした高踏的な記述に對して躊躇せざるを得ないのか。それは、こうした記述に達し得るまでのテクストの読みを明確に提示できていないからである。日本神話を近代ナショナリズムの所産として批判することは容易である。さらに今日においては、そうした近代ナショナリズム論自体を批判することも容易な状況となっている。安易な近代ナショナリズム論に對する批判というのも本シンポジウムの企図するところでもあったのだから、ただ、改めて指摘しておきたいのは、安易さに対する批判は首肯できるものの、そのことと本質への批判が無意味であるというのとは別次元のものである点である。われわれは果たして、日本神話は近代ナショナリズムの所産だとする主張の陳腐さを笑い得るほどの例証を、どれほど持ち合わせているのか。芳賀矢一の文献学や村岡典嗣の日本思想史に對する検証は十分であったのか。また国民国家形成を促す軍隊や教育と日本神話との関係は、もう新たな視点を提示することもなくなったと言うのだろうか。これらを精緻に再検討

することなくして、新たな問題設定を求めて右顧左眄する日本思想史研究とは、いったい何なのか。方法論重視という大義名分によつて、具体的な事実が看過される事態は悲劇的ですからある。別に実証主義の至上性を喧伝するつもりはないが、実証そのものが疎かにされる方法論が時として害悪をもたらすことは、それこそ「神話」研究が示していることでもある。

一方、日本的伝統讚美の神話論を日本思想史が描き出すこととするならば、神話を構成する諸テクストを通じて、伝統文化の継承と展開を明確にしなければならぬ。そして、ここでまた繰り返される問いとして、日本的伝統讚美の神話論を荒唐無稽と言いつけるだけの伝統継承の過程を示しきつているのかという点が浮上してくるのである。国文学研究における日本書紀講筵に関する研究の乏しさは、神野志隆光氏がシンポジウムで指摘した通りであるが、そうした疎漏は神話に限らずかなり多く存在しているはずである。それらを埋める作業なくして、いきなり神話の前近代性を嘖うというのも、兎戯的行為と言わざるを得ない。

このように見てみると、結局は現前の諸テクストを虚心坦懐に読むという、それこそ極めて陳腐な結論を改めて提示することとなるのだが、興味深いのは、そのよう

な虚心坦懐な「読み」というものが果たして可能なものなのかという、初歩的な疑問が常に生起するところだろう。

時枝誠記は『国語学原論』において本格的なソシユール批判を展開したユニークな国語学者である。時枝の言語理論は「言語過程説」として日本思想的にも注目されることが多いが、そこにソシユールを誤解したという批判が時枝存命中からなされていた。確かに『国語学原論』におけるソシユールに関する記述は不明瞭で、多分に誤解的要素を含んでいるように思われる。ところが、こうした点について時枝自身は、大野晋氏の回想するところに従えば、次のように言い退けているのである。

時枝理論は、ソシユールに対する批判の上に展開されている。ところが、時枝先生のソシユール理論は誤っているという批評が現われた。そのとき時枝先生はこう言われた。「ソシユールの説は、時枝の説のための磨き粉にすぎない。問題は時枝の説そのものにあるので、ソシユールに対する読み方が正しかろうが間違っているようだが、それは私にとって何ら問題ではない。」(大野晋(一九九一))

このような開き直りは、日本思想史を構成する諸テクストを前にした研究者にとって、ある意味では頼もしい

言ともなるだろう。日本思想史という名において、自らの「思想」を語ればよいからである。清水正之氏は、解釈学的日本思想史研究の意義を本シンポジウムで指摘しているが、和辻哲郎にせよ三枝博音にせよ、彼らだから許される日本思想史や神話像が存在するという面をどこまで評価するのは、それこそ対象との距離の問題であり理解者の立場の問題でもある。

また、丸山真男の『日本政治思想史研究』における朱子学の記述は、中国哲学関係の研究者から多くの批判がなされている。以下にその代表的な例として吉田公平氏のもの挙げる。

わたしが丸山真男につまづいたのは、シエーマや評價の問題ではなかった。例えば朱子学を語る場合、そこに引用された原文とそれを踏まえた説明文との齟齬をかき分けることが出来なかったことによる。丸山は朱子学を理解しないままに論述しているのだと気がついた後は、もう読まなくなつた。日本近世史研究のグループが『日本政治思想史研究』に挑戦し読書会を重ねるたびに挫折したということを直に聞いたときには、「あまりにも痛ましい」と思った。

(吉田公平(二〇〇五))

時枝にせよ丸山にせよ、そうした牽強附会が許される

のも、彼らが諸テキストを利用することで、自らの思想を語ることができたからである。彼らに対して実証主義的な批判を行うことは矛盾している。そうした矛盾は織り込み済みの問題であり、テキストは時としてそのように利用されるといふ点を理解しておくことで、彼らに対する「読み」の態度は決定できるからである。

恣意的なテキストへの対峙というのは何も近代の産物ではない。むしろ、近世国学とはそうした恣意性の中に差異化された新たなテキストの生成に他ならない。しかも、そこで新たに生成された諸テキストは、近代において実証主義的検証を経つつ再び新たなテキストを生成することになる。具体的には、宣長以降の国学研究がどのように継承されていったのかという点が、昭和前期に活況を呈した「国学史」研究において明らかにされる。その意味で近世国学は、明治以降、特に昭和前期に「国学」となったとも言い得るだろう。このことは正統的とされる国学の系譜では、あらゆる意味で思想的定置がなされ、状況論のみならず内実的な「読み」までが繰り返しなされることを意味する。典型的な例は本居宣長である。本シンポジウムにおいて前田勉氏は「孤独な知識人の夢」として宣長の解釈を行ったが、宣長への追体験を可能にしている状況は、近代以降の枠組みである点に

注意しておきたい。宣長と同時代の国学者で北辺門と称せられる富士谷成章、御杖父子の学統は、宣長、春庭父子の鈴屋門に比して明治以降になるとまったく振るわなくなる。この点について管宗次氏は「京の地というものと、京における町屋の人々や京の地下の下級官人たちにとって学芸とは何であったのかを窺えもする」（管宗次二〇〇一、七頁）として、京における湯茶や華道の流派や、心学の学舎での教えと重ね合わせて論じている。管氏の所論を敷衍していけば、北辺門の「国学」は、京における諸学芸としてのあり方を体現したものであったと考えられる。言うなれば近代へと続いていかなない学芸なのであり、だからこそ追体験も不可能なままに看過されてしまうことにもなるのである。この点を踏まえるならば、追体験可能な状況論を、どれほどテキストの読みの中で意識するのか、というこれまた対象との距離の問題にして理解者の立場の問題を誘引する。

以上のことから愚見としては、それこそきわめて陳腐な答となってしまうけれども、神話を構成する諸テキストに対し、いかに透徹した論理をもって「読み」を行うのか、ということに尽きるのである。徹底した状況把握のない追体験は夢想的であり、自己の哲学を語らない恣意的解釈は妄想的である。それらをロマン主義的な香り

高い疾風怒濤と捉えるのかは個人の好みの問題であり、評者はそれを好まない、という立場だけは表明しておいても問題ないだろう。末尾ながら妄言を謝したい。

引用文献

- 大野 晋（一九九二）「研究と読書」岩波文庫編集部編『読書のすすめ』岩波書店
- 菅 宗次（二〇〇一）『富士谷御杖の門人たち』臨川書店
- 西谷啓治（一九六二）『宗教とは何か』創文社
- 吉田公平（二〇〇五）「書評 宮城公子著『幕末期の思想と習俗』」『日本思想史学』二二七

（大阪府立大学専任講師）